

タイトル	会話における「認識性」を巡る日本語の事例分析
著者名(所属)	名塩 征史(広島大学)
連絡先Eメール	s740@hiroshima-u.ac.jp
論文内容	
<p>本発表では、はじめに「認識性 (epistemics)」(Heritage 2013) の記述に不可欠な「知識・経験」という概念を言語人類学的、認知語用論的立場から捉え直し、ある行為や情報の現れによって、それに関連する知識・経験が各者の内部で活性化される「指標 (index)」(Silverstein 1993) の仕組みを概観する。その上で、理容室における日本人男性2名(理容師と客)の会話を、各発話の意味機能とそれらの連鎖関係を中心に分析し、ある評価対象を巡って各者が繰り出す発話の応酬を経て、一方の「認識的優位性(epistemic primacy)」が明確になり、「認識的調和 (epistemic congruence)」に至る過程 (Hayano 2011) を記述する。</p> <p>当該の会話の中では、認識的優位性を主張する振る舞いとして、評価の先手を競い合うように二者間の評価発話がオーバーラップしたり、一方が語るエピソードに係る結論をもう一方が先取りして発話したりするような局面が見られた。そうした優位性の主張や結果として優位になる要因の一つとして、会話参加者のアイデンティティが関連していることも確認され、当該の会話においては、評価対象となる飲食店経営者に対して、自らも飲食店経営者である参加者がその場の評価活動を主導するような様相へと展開していた。特に際立つ言語表現として感動詞／否定応答表現の一種である「いや」が頻繁に使用されている点にも注目する。本発表ではこの「いや」が、先行する語りによって描写された評価対象の振る舞いを否定(富樫 2006)、もしくはその振る舞いが投射する「ありうる展開」をブロック(串田 2005)している可能性を示唆し、「いや」を発話する参加者が評価対象への独立したアクセスを築く手段の一つとして捉え直す。</p> <p>また、認識的に優位ではない参加者であっても、独自のエピソードを提示し続け、上記「いや」を用いて独立した評価を表明しようとするなど、ある程度の積極性を維持し続けていた。本発表では最後にこの点について、当該の評価活動(会話)がどのように開始され、そこにどのような意図や目的が想定されるかということに関連づけて一考を加える。</p>	
参考文献	
<p>Hayano, K. (2011). Claiming Epistemic Primacy: Yo-marked Assessments in Japanese. In Stivers, T., Mondada, L., and Steensig, J. (eds.), <i>The Morality of Knowledge in Conversation</i>. Cambridge University Press, pp. 58-81.</p> <p>Heritage, J. (2013). "Epistemics in conversation." In Sidnell, T., and Stivers, T. (eds.), <i>The Handbook of Conversation Analysis</i>. Wiley-Blackwell, pp. 370-394.</p> <p>串田秀也 (2005). 「いや」のコミュニケーション学 ―会話分析の立場から― 『言語』 34(11). 大修館書店, 44-51.</p> <p>Silverstein, M. (1993). Metapragmatic Discourse and Metapragmatic Function. In John A. Lucy (ed.), <i>Reflexive Language: Reported Speech and Pragmatics</i>. Cambridge University Press, pp. 33-58.</p> <p>富樫純一 (2006). 「否定応答表現「いえ」「いいえ」「いや」」 矢澤真人・橋本修(編)『現代日本語文法現象と理論のインタラクション』 ひつじ書房, pp. 23-46.</p>	